



168号

2011/ 11 /1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’

東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方

〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100

<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>

Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp

◆‘わんりい’事務局の住所表記が上記になりました。



ヤオトンの炕(オンドル)の上に並んだ、毛家のちょっと豪華な冬の朝ごはん(2009年1月) 撮影:丹羽朋子

‘わんりい’ 168号の主な目次

北京雑感(59) 麻将	2
私の調べた諺・慣用句4「病膏肓に入る」	3
媛媛讲故事(38) 怪異シリーズ⑦「鏡の縁」	4
紙上展覧会「中国年画展」	6
中国・城市(都市)めぐり(10) 上海市	8
平遙・大道の旅/後日譚「戻ってきたリュック」	11
アフリカの日々(57)「マータイさんに学ぶ」	12
読む(81)「群青の海へ わが青春譜」	13
スリランカ紹介(52) ホテル・フランシス	14
松本杏花さんの俳句集・千里同風より	15
私の四川省一人旅(50) 草原の中の街・塔公	16
‘わんりい’ 活動報告「第4回漢詩の会」	18
‘わんりい’ 掲示板 I 写真展「スリランカのまなざし」	19
‘わんりい’ 掲示板 II	20

【表紙写真説明】 蒸したての花巻にはたっぷりの小豆あんこをつけて、体に染み入る雑穀粥は根菜のお漬物で自分好みの味に。シャキシャキした食感が絶妙なじゃが芋の細切り炒めは冬の定番料理。部屋の奥に掘った貯蔵穴に長期保存できる芋類は、新鮮な野菜がなくなるこの季節の貴重な野菜。

昨日遠くに住まう子ども家族が久々に集ったお祝いに作った餃子の残りも食卓に並ぶ。陝北の農村ではオンドルの上にあがって食事をするのは家の男たちと客人だけ。女性陣や子どもはカマドの周りや立ったままで、どんぶりによそったご飯を口にかきこむ。

写真の奥さんと孫のペイペイがテーブル代わりにしているのは、一家の数日間分の日常用水を蓄えた陶製の大甕。外はようやく顔を見せた朝日がほんのりと空を彩り始める。ヤオトンのドーム型の室内いっばいに暖かい湯気がひろがる。野良仕事に出かける前のほっこりと心地よい時間が流れていく。

(丹羽朋子 中国民間芸術研究に従事)

多くの地方自治体で、月2回広報誌を出していて、必ず、サークル活動のお知らせページを設けています。そこには、毎回、「健康麻雀(マージャン)」のお誘いが載っています。あのスペースには、同じサークルの掲載は2ヶ月に一度とか、何らかの制約がある筈ですから、毎回2,3のサークルが「お誘い」を掲載していると言うことは、随分たくさん同じようなサークルがあるのでしょう。確かに、麻雀は頭を使い、手先も使うのでボケ防止になると言われ、定年後に麻雀を始めた方が、私の知る範囲でも何人もおられます。

麻雀を、中国では麻将(ma jiang マージャン)または日本語と同じ字を使って麻雀(ma que マージャン)と言います。清の時代に流行り始め、日本には大正時代に伝わったようですが、日本で独特のルールが付け加えられて、複雑なゲームになったようです。中国人の友人に依ると、中国のルールは日本ほど複雑ではないようです。

私が働き始めた1970年代は、今のようにコンピュータは介在せず、人と人との繋がり方で仕事をしていましたし、余暇の娯楽も今ほど多様化していませんでしたから、退社時間になると4人連れ立って親睦を図りに行くのをよく見かけました。仕事から解放されて、お酒を片手にタバコをくわえ、冗談口を叩きながら楽しく遊ぶのはともかく、多少なりともお金をかけるので、真剣にのめり込む人も少なくありませんでした。職場によっては、給料日に麻雀のかけ金が精算のために飛び交ったそうです。そんな様子と比べれば、現在は確かに「健康麻雀」ですね。

昔、社員旅行などでは、麻雀の仲間に入り、手心を加えてもらいながら随分遊びました。普段でも、メンバーがどうしても揃わない時、声をかけられて、葱を背負ったカモになったものです。自分の手を揃えるのに精一杯で、相手方が何を待っているのかなど考えるゆとりはなく、しばしば相手の待っている牌を捨てては喜ばれていました。また、やっと上がるかと思えば、上がれなかったりと散々な目に遭いました。麻雀は好きですが、規則でガンジガラメの日本の麻雀にはついていきません。

北京の街角では、路上に台を出して将棋・トランプ・麻雀等をしているのをよく見かけます。大抵は近所の友人同士が遊んでいるようで、ちょっと見たところ、複雑なルールではないようですが、実際はどんなものでしょうか。聞くと依ると、中国人は昔から賭博好

きで、紀元前、殷の時代から既に将棋やチョボというゲームで賭博が行われていたそうです。特に将棋は、当時から大したルールの変更もなく何千年も続き、中世には、賭博としての将棋が知識人の教養の一つとされていたようです。将棋のルールを何千年も変えない中国の人々が、数百年しか歴史のない麻雀のルールを頻繁に変えるとは思えませんから、日本のようにどんどん複雑になることはないでしょう。

私が体験して確実に言えることは、中国の老人達が楽しむ麻雀は、ルールが簡単で、掛け金も少なく、本当に健康的だと言うことです。これを中国語では「衛生麻雀」と言うそうです。ルールは非常に簡単で、役は、上がり・面前・一气通貫(龍)・七対子(チートイツ)の4つだけです。私が何よりも気に入っている点は、振り込んでも3人が平等に(親は2倍)払ってくれる点です。更に嬉しいのは、掛け金がなくなっても続けられて、相手が上がった時は払わないけれど、自分が上がった時はちゃんと掛け金が受け取れる点です。

私は、北京滞在中ほとんど毎週、バスに乗って友人の家に向かい、友人のお母様とそのお仲間2人と卓を囲みました。掛け金は、一荘(チャン)5元です。1角・2角・5角の紙幣を5元分用意して行きます。計算は簡単で、最低の上がりは4角、面前なら8角、七対子は12角、一气通貫(皆さんは龍[ロン]と言います)は面前なら12角、開いて造った時は8角です。親であればそれぞれ倍になります。計算はこれだけですから、誰にでも簡単に出来ます。

北京の5元は、初めのうちこそ、食材の値段と比べてそれなりの価値がありましたけれど、物価が徐々に上がって来て、5,6年前には既に気軽な金額になっていました。それでも、たまに勝って、5元が13元になったりすると、金額以上に嬉しかったものでした。しかし困ったことに、段々と小額紙幣が少なくなり、紙幣で5元分揃えるのが難しく、コインも使うようになりました。因みに、私のお仲間は点棒を使わず、直接お金をやり取りし、最後に手持のお金を数えて、勝ち負けを競っていました。

日本でも、麻雀が「ボケ防止に有効」と言われて久しいのですから、公民館などで麻雀卓を用意して欲しいものです。そうしたら真っ先に利用して、この中国式麻雀を広めたいと思います。日本だったら、一円玉をたっぷり、5円玉・10円玉を取り混ぜて50円用意しましょう。1角=1円の計算です。

「私の調べた 諺・慣用句」は健康上の理由により、しばらくお休みさせて頂きましたが、お蔭様で健康ももとに戻りましたので、今月号より再開させて頂きます。この間、お忙しい中ピンチヒッターを務めて頂きました楠木マリさんにお礼を申し上げます。ありがとうございました。

さて、今回の諺・慣用句は「病膏肓に入る」です。

私達はいろいろな病気を患うものですが、どう手をつくしても治る見込みのない不治の病と分かったときに、「残念ながら医者も匙を投げてしまったようだ、“病膏肓に入る”だね。」と

言ったり、また別の場面で、何でも収集する病的なコレクターを指して「彼の収集癖はどうやら“病膏肓に入る”というやつだね。」と言ったりしますが、この諺も出所は中国の故事でした。

ところで、病膏肓は“やまいこうこう”と読むのですが膏肓の肓の字が盲目の“盲”の字と混同されて、病膏盲(やまいこうもう)と言う人も多いようです、でもこれは誤りだそうです。

さて、どんな内容の故事でしょうか。その前に辞書を調べて見ましょう。

▲三省堂 現代国語辞典：

「病膏肓に入る：①病気がなおる見込みがなくなる。②ものごとに熱中して、そこからぬけられなくなる。“肓”と“盲”を混同して、“病こうもうにいる”と読む人も多い」

▲小学館 中日辞典：

「病入膏肓 bìng rù gāo huāng
 病膏肓に入る。病気が重くて、もはや治療のできないこと、事態が深刻で、救いようのないこと」

さらに“膏肓”として「からだの中の、奥深くで治しにくいところ。(俗にこうもうとも読む)」とあります。

この成語の出自は〈左伝¹⁾・成公十年〉の中の「疾不可为也。在肓²⁾之上，膏²⁾之下，攻之不可，达之不及，药不至焉，不可为也」の部分です。

(病気は治せない。肓の上、膏の下に在り、之を攻めるのは不可能だ。(針は)達することが及ばず、薬も(病気の場所まで)至らないので、治せない。)

中国の春秋時代に晋の景公³⁾が突然重病にかかりました。景公は秦国に大変優れた名医が居ると聞いてすぐに人を使って名医のところへ自分の病気を治してくれるよう頼みに行かせました。

医者が到着するまでの間に景公はぼおっとして夢を見たのですが、その夢の中で二人の子供がひそひそ話しをしているのが聞こえました。一人の子が「もうじき名医が来るらしいぞ、やっつけられるかも知れないからどっかへ隠れようぜ」と言うともう一人の子が「じゃあ俺たちは肓の上と膏の下の間に隠れよう、そこならどんな薬でも俺たちをやっつけることはできないよ。」と言いました。

程なく秦国の名医が到着しました。彼は景公の診断が終ったあと、景公に告げて言いました。



イラスト：叶霖(Ye Lin)

「残念ながらこの病気はどんな薬でも救うことができません。病巣は背の上、膏の下にあるため、針や灸も効きませんし、針を刺しても届きません。煎じ薬も効果ありません。ですから、この病気は治しようがないのです」

景公は話を聞いた後、心の中で思いました。“なるほど医者の話は全部夢の中で二人の子供が話していたこととまったく同じではないか。これは凄い医者だ”

そこで名医に向かって言いました。

「あなたの医術はやはり伝え聞いた通り本当に優れています。さすがに大したものですよ」

と言って、手厚い贈り物を持たせて秦の国へ帰っていただいたということです。

■注記

1) 左伝：『春秋左氏伝』(chūnqiū zuǒshìzhuàn/しゅんじゅうさしでん、旧字：春秋左氏傳)は、孔子の編纂と伝えられる歴史書『春秋』の代表的な注釈書の1つで、紀元前700年頃から約250年間の歴史が書かれている。

通称『左伝』。『春秋左伝』、『左氏伝』ともいうことがある。現存する他の注釈書として『春秋公羊伝』、『春秋穀梁伝』とあわせて春秋三伝(略して三伝)と呼ばれている。三伝の中で、左伝は最も基本的だとされている。『左伝』の作者は、魯の左丘明であるといわれているが、定かではない。

2) 背/膏：背(横隔膜の上の見えないところにある肉)、膏(心臓の下にある脂身)“膏背”で胸と腹の境目の、身体が一番深い、見えないところの意味。

3) 景公(けいこう)：景公(?～紀元前581年)は、中国春秋時代の晋の君主(在位：紀元前600年～紀元前581)。姓は姫、諱は拋。成公の子。

(注記1, 2フリー百科事典「ウィキペディア」より)

唐の時代、江蘇省の揚州では、質の良い鏡を作る場所として広く知られていたところだったそうです。

天宝頃(742～755)、韋栗という役人が江西省の新淦の丞¹⁾に任命され、彼は家族を連れて船で赴任先に向かいました。その途中、船が揚州を通りかかりましたので、ここで一休みすることにして、韋栗の一行は岸に上がり町の見物をしました。

韋栗には十歳になる娘がいました。娘は、裏面に金色の漆で描かれた花模様のある鏡が気に入って、父に買ってほしいとねだりましたが韋栗は、

「今はまだ赴任の途中で、向こうに着くまでは色々大変なことが起ってお金が必要なことがあるかもしれない。だから今はまだこのような贅沢な物を買う余裕はないのだよ。向こうに着いたら、買って上げよう」

と言って、娘の懇願に応じてくれませんでした。

しかし、赴任地に着くと何かと忙しく、韋栗は娘と約束したことをすっかり忘れてしまいました。ところがその娘は、韋栗が任地について一年ほど経た頃、思ってもみなかったことに病気になり死んでし

まいりました。

それから何年間かして、韋栗の任期が満了し、娘の柩も一緒に船に乗せて帰ることになりました。

帰路も往路と同様に、揚州に着きますと船を停泊させ、暫く休むことにしました。

船が舳^{もやい}を繋いで暫く経った頃、岸に召使いを連れて鏡を買おうとしているらしい若い娘の姿がありました。見るほどに眉目形^{みめかたち}が美しい其の娘は、如何にも金持ちの家柄のお嬢さんといった雰囲気^{いんけい}を漂わせています。周りにたむろしていた鏡売りの人々は、我先に鏡を売りつけようと娘の周りに集まってきました。その中に歳の頃まだ二十代になったばかりのような、色白の若者が直径一尺(30センチ)、裏には金の漆で花模様を描いた鏡を持って娘の前に進んできました。娘はその鏡の美しさにすぐ目を奪われました。

「おいくらですか」

「銅錢²⁾五千だ」

女の子は銅錢五千を取り出すと若者に渡し、若者は鏡を娘に渡しました。すると隣にいた鏡売りが娘と若者の間に割り込んで来ると、

「こっちはもっと安くいい物があるぞ。銅銭三千だ」

と言いました。

先的美青年はそれを聞くとすぐに

「ぼくも銅銭三千に負けよう」

と言いました。

娘は端正な顔立ちの若者に心を奪われたようすで若者を見つめたまま暫くじっと立っていました。が、まもなく名残惜しそうに鏡を持って立ち去って行きました。

若者は鏡を買ってくれた美しい娘と親しくなれたらどんなにか嬉しいだろうと、下人に娘の後を追わせ、どこに住んでいるか見届けさせました。その後、自分の店舗に戻り娘に手渡されたお金を確認しようとすると、なんと先程娘から受け取った三千銭の銅銭は黄色い紙銭に変わってしまっていました。

娘の住むところを下人から聞いた若者は紙銭を持って訪ねて行きました。

韋栗の船に着くと

「先程、こちらのお嬢さんが銅銭三千で鏡を買ってこの船に戻られました。ところが支払ってくださったそのお金は家に戻ってみると紙銭に変わってしまいました。その訳をお嬢さんにお訊きしたいと思ってお伺いしました」

と言いました。

韋栗は、

「私にも娘が一人いましたが、もう数年前に亡くなりました。何かのお間違いではありませんか」

と訊き返しました。

若者は、

「そのお嬢さんは確かにこの船に入りましたよ」

「それでは、その娘さんというのはどんな格好をされておりますか」

韋栗は更にいろいろ若者に訊ねました。若者は娘の顔立ちや、服装などを詳しく話しますと、韋栗と妻は思わず涙をぼろぼろ流して語りました。

「あなたがおっしゃるのは、まさに亡くなった我が家の娘の亡くなる前の姿です。しかし、すでに死んでしまっています。この船には娘はもういないのだよ」

韋栗は、少年を連れて一部屋ずつ順に船を回って

見せました。確かにあの眉目形の美しい娘の姿はどこにもおりません。最後に、柩の部屋に行きました。が部屋には柩以外なにもありませんでした。

と、その時、

「え！ 不思議だわ」

と、韋栗の妻が何かに気が付いて言いました。

「私が、娘があので困らないように、黄色い紙で剪った紙銭の額が足りませんわ。九千銭分の紙銭を娘の柩の上に置いときましたが、今は六千銭しか残っていませんわ。どういうことしょう？」

韋栗の妻が驚きを隠せないような表情で話すのを聞いていた韋栗やその場に居合わせた人たちはその不思議な出来事に顔を見合わせるばかりでした。しかも若者が差し出した三千紙銭は正に柩に置かれた紙銭と全く同じものではありませんか。

韋栗は突然頭の中で何かひらめくものを感じて、

「早く、柩を開けてくれ」と召使に命じました。

柩が開けられ中を覗くと果たして白骨の隣に若者から買い取った鏡が置かれてありました。

柩の周りを取り囲んだ人たちは、娘の、生前に叶えることのできなかった鏡への思いを知って深く心を動かされ嘆き合いました。と同時に、深い望みは生前に叶えられなくとも死後になっても叶うことがあることを知りました。

「お嬢さんを一目見て、その美しさに魅せられました。このような出来事もご縁かと思えます。私にとってお金のことはどうでもよいことなのです」

若者は自分もまた娘への深い想いがあったことを白状すると、韋栗に娘を供養して欲しいと告げ、一万銭を残して立ち去って行きました。

● 注釈

1) 丞：補佐官、次官

2) 銅銭：唐の貨幣、1000銭＝1貫(吊)、約1両白銀にあたる。

【‘わりい’の原稿を募集しています】

原則として、2月と8月を除く毎月発行の会報‘わりい’は、会員の皆さんの原稿でまとめられています。体験された楽しい話、アジア各地で見聞した面白い話などなど気楽にお寄せいただければと願っています。

* 紙面の都合上、掲載までお待ち頂くことがあります。また、作者のご了解の上、余儀なく手を入れたり、カットさせて頂いたりすることもあります。

紙上展覧会
日本の浮世絵に影響を与えた中国の彩色版画

中国年画展 I

埼玉県山西省友好記念館「神怡館」
解説 神林直樹

神怡館の名で親しまれている「埼玉県山西省友好記念館」は登山をされる方にはなじみ深い両神山山麓の小鹿野町にあります。中国仏教聖地の一つ五台山にある仏光寺東大殿をモデルに建てられたと言われる寺院風建築物です。

1982年、埼玉県と中国山西省との友好県省が締結され、満10年を記念して、山西省の五台山によく似た風土ということで両神村(当時)が選ばれ、両県省友好のシンボル施設として建設されました。以来、この秩父の山間で、ひっそりと、しかし、地道に山西省

を初めとした中国の歴史、自然、文化等を紹介し続けています。

昨年、「わんりい」会員所有の剪紙がここで展示されて以来、関りが増え、現在、開催中の「中国年画展」にも「わんりい」会員の岩田温子さん所有の年画が展示されています。

是非皆様にも中国年画の面白さ・楽しさを味わって頂きたい、神怡館の展示をプロデュースされていらっしゃる神林さんに紙上展覧会を開催して頂きます。

埼玉県小鹿野町にある神怡館という中国文化を紹介する展示館では、今年末、12月25日(日)まで「中国年画展」を開催しています。

年画とは正月や祝い事があったときに門や部屋に貼り、魔除け・迎福の役割を果たす絵のことです。その多くは木版画で刷られ、鮮やかな色彩は日本の浮世絵に影響を与えました。

今回は展示物の中からいくつかの年画を紹介し、その魅力を少しでも伝えられればと思います。

★神荼・鬱壘(山東省/楊家埠年画)

門に貼り家を守護するのは門神と呼ばれ、神荼(右)と鬱



壘(左)はその代表格です。彼らは兄弟神で、人に危害を加える鬼を捕まえ、虎に喰わせていました。この神話から漢代より、人々は桃の木に彫った彼らの像を門に飾り魔除けとします。木版印刷の技術が発達してくると紙に刷った彼らの絵を門に飾るようになり、これが年画の起源とされています。

★秦叔宝・尉遲敬徳(陝西省/鳳翔年画)

秦叔宝(左)と尉遲敬徳(右)は竜王の怨霊から皇帝を護ったという、実在した唐代の武将をモデルとする門神です。門神は2体セットで、左右対称に描かれるのが特徴です。



★竈神(山西省臨汾年画)

台所の神様。竈(かまど)に宿ってその家を1年間見守り、年末には天上へ帰って家族の行いを報告します。

人々は悪い報告をされないよう供え物をし、口の部分に飴を塗ってご機嫌を取ったりします。上部に印刷されているのは暦で、カレンダーとしての役割も果たしてきました。



★土地公(山西省/臨汾年画)

土地の神様。大地の神というよりは、人々の住む土地を管轄している神です。人々の生死や財務を司るため身近な神として知られ、悩み事の祈りも気軽に引き受けてくれるそうです。

老人の姿をしており、夫婦で描かれることもあります。

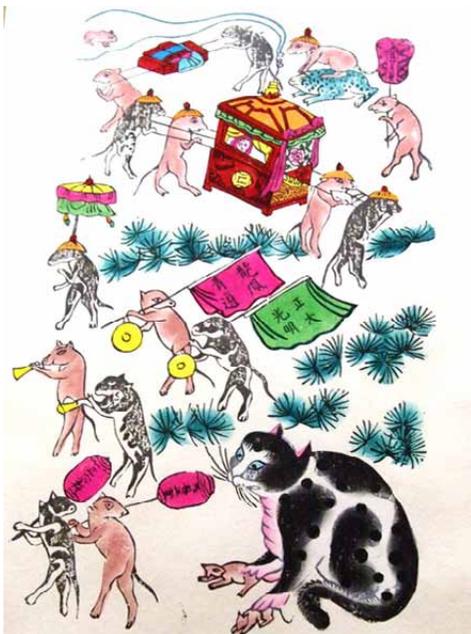


★^{しやうき}鍾馗(河北省 武強年画)

鬼払いに使われた棒が人格化したという説もある、悪鬼を追い払う文武両道の神ですが、福を呼び込む役目も果たします。この図案は、日本では邪気を払う姿と誤解されがちですが、中国で蝙蝠は幸福の象徴。すなわち招福の図案なのです。



★^{ろうそかしよ}老鼠嫁女(四川省/綿竹年画)



鼠の嫁入り。鼠は子孫繁栄の象徴ですが、違和感があるのは右下にいる猫。ここには老鼠嫁女の持つ裏の意味が隠されています。

日本の昔話ですと鼠が娘を太陽へ嫁がせようと思ったところ、太陽は雲が怖いと言い、雲は風が怖い、風は壁が怖い、壁は鼠が怖いということで、結局鼠に嫁いでめでたしめでたしです。しかしこの図案では先があり、鼠は猫が怖いので猫に嫁がせることとなりました。お祭り騒ぎで花嫁を猫のところへ送るのですが、このあと、花嫁を含む全ての鼠は猫に食べられてしまいます。結局無理してもろくなことはないから、高望みはしない方がいいという話でした。

★^{かんてい}関帝(山西省 臨汾年画)

三国志に登場する武将、関羽です。

219年、関羽は呉の將軍呂蒙に捕らわれ斬られますが、その首を送られた魏王曹操が直後に他界。呂蒙もまもなく死んだことから、人々は関羽の祟りと恐れ、廟を建てて霊を鎮めようとなりました。

このため初期は怨霊神として祀られていましたが、徐々に武神として頭角を現し、その武勇は早魃^{かんばつ}の悪霊を追い出して雨を降らせる農耕神としても信仰されるようになります。

義理堅い性格だったため、清代になると商人からは財神として祀られ、関帝の年画は商売繁盛を願い、商店に飾られるようにもなります。

以上見てきたように、初めは魔除け・迎福など限られた目的で使用されていた年画ですが、庶民でも気軽に紙が買えるようになったところからその題材は大幅に増え、教訓・物語を含んだものや鑑賞目的の美人図なども生産されています。



中国年画展 ～日本の浮世絵に影響を与えた中国色彩版画～

*山西・山東・河北・天津・四川などの年画約300点及び呪符として使われた白黒版画・紙馬を展示

- 会場：埼玉県山西省友好記念館・神恰館(埼玉県秩父郡小鹿野町両神薄2245)
 - 問合せ：☎ 0494-79-1493 (開館：9:00～17:00) ◆ 休館日：火曜日、祝日の翌々日、年末年始(12/29～1/1)
 - 入館料：350円(65歳以上の方は無料) ◆ <http://www18.ocn.ne.jp/~ogano/shenyi.html>(キーワード:しんいかん)
- 主催：(財)小鹿野町振興公社 協力：麗澤大学 金丸良子教授/日中文化交流市民サークル'わんりい' 岩田温子

上海市といえはすぐ頭に浮かぶ観光地は外灘(以下バンドという)・豫園・南京路・東方明珠塔等であろうが、これらは観光に行かれた方も多いと思うので、別の視点で400～500年前・100～150年前から現在というタテ軸の上海を書いてみたい。

1. 豫園(1559年着工、1577年完成)

この豫園は完成すると「為東南名園冠」(江南の名園で一番)といわれた。面積は現在約2万m²(約6000坪)だが当時は5万m²あった。この名園も「北京市」の中で書いた圓明園・頤和園同様1842年にアヘン戦争で勝利を収めたイギリス軍が徹底的に破壊した。今の同園は中華人民共和国成立後に造り直したものである。従ってまだ50年位しかたっていない。

さてこの豫園だが、「豫」という字にひっかかった。辞典では「うれしい、楽しい、のんびりしている」の意と出ている。また河南省の略称であるが、古代「夏」の時代の九州の一つ豫州に河南地方が属していたことに由来する。豫劇(ユージュ)という劇も河南地方に伝わる伝統的な演劇である。人名にも使われるとあるので豫さんという人の庭園かとも思ったが、ガイドブックには藩允端という人が父親のために作った私園とある。なぜこの名園を「豫園」と名付けたのだろうか。あるガイドブックに「豫」は平安という意味とあったが、私は納得していない。

ちなみに上海市の略称は「滬」(フー)である。この字の意味は、その昔小さな漁村であった上海地方に広く使われていた竹編みの漁具のことである。北京と上海を結ぶ鉄道路線の名を京滬線というが、略称は一字なので車のナンバー等いろいろと使われている。(北京の略称は京または燕)

2. 上海の城壁(16世紀に築城)

悪名高き倭寇は、13～16世紀(元から明の時代)に瀬戸内海や九州の海賊が中心となり、戦いを挑んだり中国の沿岸で略奪行為を行った。しかし後半は、中国人が倭寇となって悪事を働くことが増えていった。

上海地方は16世紀ころよく攻められたため、これに対処するために短期間で城壁を築き上げた。城壁内は、租界時代に豫園は破壊されたものの外国人は自由に出入りできない

中国人だけの街だったようだ。しかし残念なことに城壁は近年とり壊され、その跡地は、「中華路」と「人民路」の環状道路となっている。地図で確認するとたしかに楕円形の城壁のあとが伺える。中国各地に残存する城壁はほとんど長方形であるが、円形のものはとても珍しいものであるらしい。

浦東地区の高層ビル群、リニアモーターカー、高速道路、むかしながらの庶民の住まいに代わる近代的高層マンション群、網の目の地下鉄網など…、近代化ばかり目につく上海市であるが、古い上海のたたずまいや雰囲気も残すようにすればもう少し地に足のついたイメージの都市となっていたであろうと思った。

3. 水郷・朱家角の放生橋(1571年完成)

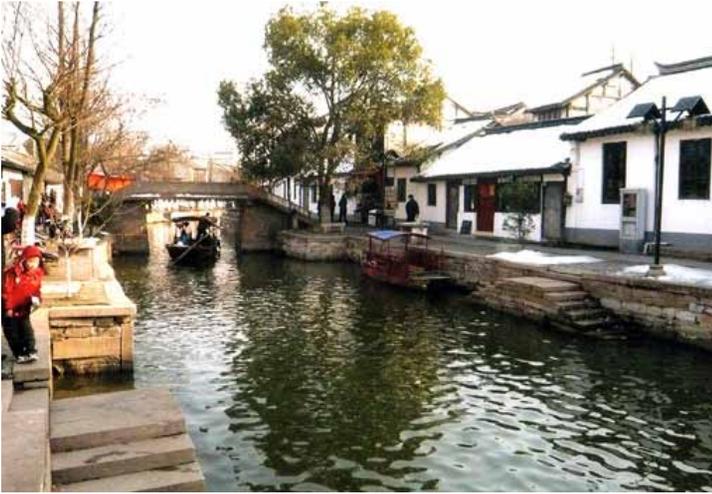
上海市の西のハズレから太湖に至る地域は、大小の湖、縦横に走る運河の中に古鎮が点在している。周荘・同里等と共に朱家角は有名である。瓦屋根、灰黒色の家壁、石畳の路地、行き交う小船には生活の匂いがあふれ、のんびりとしてやすらぎを覚える風景である。この地方は、後背地の豊富な農作物の流通路にあたり、10世紀から12世紀ころにかけ「鎮」と呼ばれる水運の町があちこちに出来はじめ、発達していった。唐の終わりころから宋の時代にかけてである。

どの鎮も似ているが、朱家角で有名なのが明代に築造された放生橋である。石造りで中央部が高くなっており、なだらかな二等辺三角形となっている。全長72mの水郷地帯最大のこの橋は5つのアーチがつけられ、中央部のアーチの下は比較的大きな船が通ることができる。中国には、私の好きな石造りの橋がどこにでもあがるが、この堂々とした放生橋は他では見られない。古びたベージュの色合いも歴史を感じさせ一度見ると忘れられない。

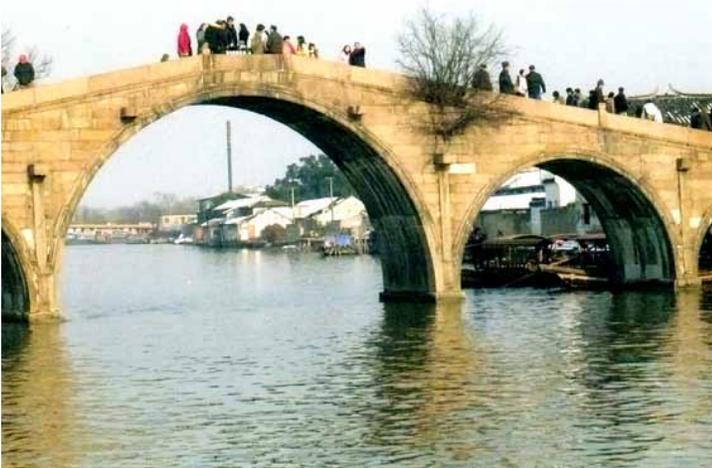
さてこの橋の名前の「放生」(ファ



豫園商場の前で



水郷古鎮風景



放生橋

ンション)であるが、中国人の友人がメモに書いて教えてくれた。それには「放生とは生き物を放生かすこと。仏教の信徒として来世に自分はもっと幸福でもっと順調で生き返るために、今生に慈悲心をもって家畜や鳥はもちろん、信仰の強い人は蟻でも殺さないで生かす」とあった。広辞苑で調べると「ほうじょう」と読み「捕えた生き物を放ち逃がすこと」と書いてある。

中国を旅すると、ときどき「放生池」や「放生橋」を見かけるが、このような形で仏教が実践されているのには感心した。残念ながら日本では私は見たことがない。これも広辞苑によると「放生会」(ほうじょうえ)と言って仏教の不殺生の思想に基づいた儀式とあり、旧暦8月15日(中秋節)に行われるそうである。石清水八幡宮(京都府)の放生会は有名」とある。いつかここを訪ねてみたい。

この朱家角には2008年2月上旬の春節休暇を利用して友人たちと5人で行った。その中に夫婦が一組いたが、この二人は橋のところに来ると中央部に向かって石段を登って行った。橋の上には、バケツに小さな魚をいっ

ぱい入れて、通行する人に売っている人が数人いる。つまり、それを何匹か買って橋の下に行き、運河に放してあげると「放生」という善行をしたことになるようだ。遠くから見ていると友人夫婦はそこで魚を買い下において運河にそっとその魚を逃がしてやっていた。ご主人はガンの治療中だったのである。私は二人の気持ちが痛いほど分かった。

4. 和平ホテル(和平飯店・北樓)(1929年竣工)

1842年の南京条約後約100年間の租界時代の中で、特に20世紀に入り黄浦江沿いには、欧米様式の建物が建てられバンドと呼ばれるようになりエキゾチックな雰囲気をただよわせている。ちょうど本年9月、「シャンハイ」という話題の映画を見たが、第2次世界大戦突入直前の1941年の租界の情景が見事に映し出されていた。

当時の中国人にとっては苦々しい存在であったことだろう。しかし、時代が下って今やデートスポット、一大観光スポットとなった。自国の領土で1904～5年に行われた日露戦争の激戦地である旅順の203高地には、「勿忘恥辱」(恥を忘れるな)の小さな看板が立っているが、このバンドもいってみればこの看板を建ててもいいところである。

この和平ホテルだがバンドで一番有名な建物である。所有者のイギリス商人の名前をとりサッスーン・ハウスともいわれる。北樓の1階にある「爵士酒吧」(爵士はジャズ、酒吧はバーも意)に行かれた方もあろうが、とても素晴らしい空間である。ここで毎夜ジャズバンドの演奏が行われる。ジャズを演奏するのは70才位の老人ばかりでこれが一つの評判を呼んでいる。演奏する曲も今どきのテンポの激しい、落ちつきのない曲はない。「A列車で行こう」「セントルイスブルース」「スターダスト」「ムーンリバー」……などの胸にジーンと来る曲ばかりである。

欧米人の客も多く、お酒をのみながら聞くこの場所は別世界である。1930年代の華やかな租界の一部を体現した印象を持つが、一方では租界には墮落した闇の世界が広がっていた。

5. 宋家の三姉妹(19世紀末～20世紀)

19世紀末、上海で「昔、中国に三人の姉妹がいた。ひとりには金を愛し、ひとりには権力を愛し、ひとりには中国を愛した」と言われた三姉妹が生まれた。中国の近代史を見るとき、この三姉妹を抜きには語れないであろう。

長女の霽齡は孔財閥の御曹司と結婚した。

次女慶齡は「中国革命の父である孫文の夫人」という修飾語が不要なほど有名である。反帝国主義運動に生涯を捧げ、「国母」として中国国民に慕われているらしい。孫文の死後は最終的に共産党と共に歩んだ。1949年10月1日の中華人民共和国の成立を天安門上で、毛沢東が宣言した時、そのそばに慶齡は6人の副主席の一人として立っていたのである。「三民主義」を掲げた孫文は天国でどのように思っているであろうか。彼女の故居は上海市の淮海中路にある。北京にも故居があり、どちらも観光名所である。

三女的美齡は蒋介石夫人としてこれまた有名である。第2次世界大戦中の1943年2月、米連邦会議における流暢な英語による抗日演説で満場の拍手喝さいを受け、米国の親中反日を決定的なものとした。このときの画像をいつだったかテレビで見たが、その時の堂々たる演説は忘れることができない。中国の激動期を三人は別々の道を歩んだが、歴史に大きな足跡を残した。彼女たちからは中国女性の強さをまざまざと見る思いがする。上海の女性は強いと言われるが、ここから来ているのではないか。

6. リニアモーターカー(2003年末完成)

中華人民共和国がスタートして50年余り後、中国はリニアモーターカーを世界で初めて導入した。チケットには「磁浮列車」と書かれている。世界初といっても自国で技術開発したものではないから、あまり自慢できるものではない。

2007年8月に乗車したが乗車券は50元だった。開通当初は70元だったらしいがなぜか値下げしている。面白いのはチケットの裏に「大人1人について1.2m以下の背だけの児童は無料。1.2m以上は大人料金」と書かれていることである。年齢や学年ではなく背の高さで判断するのは合理的といえ合理的かも知れない。学生証など身分証明書がなくてもすむわけであるし。発育のいい子は割を食うけれど……。

乗った感想は、「最高時速430kmは、翼があれば空に飛び立つ速さである。正直こわいと思った。二度と乗りたくない」である。このリニアは地下鉄2号線の龍陽路駅で乗るわけだが、途中駅はなく約7分で上海浦東空港についた。次は何を世界で一番に導入するのであろうか。

7. 上海万博(2010年5月1日～10月31日開催)

中国での正式な呼び方は、「上海世界博覧会」で略して上海世博会と言った。上海市の母なる川、黄浦江の両岸328ヘクタール(大阪万博は180ヘクタール)に会場を

つくった。この場所は以前、江南造船工場があり、国はこの工場等を別の場所に移し用地を確保した。友人はこのあたりは中国の近代工業発祥の地と教えてくれた。

世博会開催にあたり、何でも世界一でなければ気のすまない中国政府は、入場者数の目標を大阪万博を超えるため、7000万人(1日当り役40万人)とし、上海市民にはタダの入場券を配ったり、かなり無理をしながら目標を最終的にクリアした。

4月下旬から湖南省の張家界への旅行の帰りの5月3日、1日だけこの世博会を見ることができた。旅行社が予め手配してくれた入場券は「指定日入場券」で200元であった。当日はかなり込み合う覚悟で行ったが、初めの3日間は当日券を売らず予約客のみ入場できたらしく、ゆったりと見ることができた。約12万人とあとで聞いたが40万人の予定が12万人であるからゆったりしているはずである。

それでも日本館は1時間半待ちであり、中国館の2階・3階は予約券がなければ入れないので、客の入りが比較的少ない国のパビリオンを5～6カ所見た。中国館のデザインはさすがに印象に残るものであった。閉会後はどうするのであろうか。日本館のデザインは蚕のまゆの形だったが、私としては期待はずれだった。一番心に残った風景は対岸に渡るとき船から見た会場の遠景であった。黄浦江の川風に吹かれながらいつまでもデッキから眺めていた。

▶おわりに

上海は、「滬」の時代から、水郷古鎮が形成されていき、後背地の農業基盤のもとに次第に大きな町を形づくっていった。16世紀に倭寇に荒されることがあったが海運にとって重要な拠点として成長していった。

近年に至り、清国の古い政治・経済・軍備体制は、産業革命を経てすべてに近代化された英国に圧倒され、英国をはじめとする諸外国に「租界」という治外法権の地を提供せざるを得なくなった。さらに三合会等の裏社会組織はアヘンや賭博等で暗躍した。この地域は無政府状態ともいえる地となり「魔都」と呼ばれる都市となった。

そして1921年魔都上海のフランス租界地において中国共産党の第1回全国代表大会が開催され、紆余曲折しながらも中華人民共和国の成立に大きな役割を果たした上海。今は世界の経済を動かすほど成長した上海は50年後はどのような姿を見せるのであろうか。

——ともかく田舎の漁村であった上海は、歴史の波に翻弄されながら巨大都市に変貌した。半世紀後の中国はもはや発展途上国という方便は通用しない。国際社会に緊張感を与えない、責任ある大国に導く上海であって欲しい。

太原铁路局局长收到一封异国来信 热心车长感动日本旅客
(親切な列車長に日本の旅客が感動～太原鉄路局局長、
異国からの手紙を受け取る～)

上記は2011年6月30日付「太原晩報」に掲載された記事の見出しである。同行者の一人が大同駅にリュックを置き忘れた。しかし、鉄路局の方々の尽力で無事、手元に戻った。後日、感謝の気持ちを伝える手紙を鉄路局局長に送った。それが現地の新聞に載ったのである。

「わんりい」9月号に「平遥・大同の旅記録」を書いたが、旅行前からお世話になった太原出身の中国語の先生にも顛末を報告していた。その後、事情を全く知らない太原に住む先生のお父さんが記事を目にし、国際電話で話題になった。先生は私のことだとすぐに気づいて、その新聞を手に入れてくださったのである

一部始終は今でもありありと思い出すことができる。山西

の旅も終わりに近い6月6日、私たち4人は朝早く大同の駅に着いた。荷物検査をすませ北京西行き列車に乗り込む。3人は中国の寝台車に初めて乗ったので列車内の様子に興味津々だった。車内で落ち着いた頃、一人が、リュックが見あたらないことに気がついた。定かではないが手荷物チェックの検査台に置き忘れた気がするという。中にはかなり高価な電子辞書も入っているというので、ほとんど望み薄とは思ったが、列車の乗務員に伝えに走った。すでに発車5分前である。拙い中国語で訴えると乗務員は、発車するのでもかく席に着き後の連絡を待つようにと言った。

発車後しばらくして、女性の列車長がリュックの形状、色、中味について事細かに質問しに来た。彼女に届いていた情報と合致したのか、話を聞き終わると、リュックが大同駅の手荷物検査台に置き忘れてあり、駅で保管している、と言った。それを知り、なくした本人はもとよりみんなから安堵の声が漏れ、心配顔が笑顔に変わった。列車長に礼を述べると共に、奇跡だ、日本でもこのようなケースでは見つからないことが多い、と思わず言ってしまう。

見つかったのはいいが、さて次はどのようにそれを受け取るか。私たちは日本からの旅行者であり、これから北京

西駅まで行って北京に一泊。翌日朝早くの飛行機で帰国しなければならない。説明を聞いた彼女は、どこでどのように受け取ったらよいかは後で知らせる、安心して待っているようにと言い残してコンパートメントを出て行った。

結局、私たちの列車の到着から4時間後に北京西駅に着く列車から荷物を受け取れるように手配し、到着予定時刻、列車名、号車番号等必要なことを書いたメモを渡してくれた。

列車が北京西駅に着くと、列車長はすぐに北京西駅の駅員に私たちを紹介し、後を頼んでくれた。連絡もスムーズで、その後も順調に運び、その日の夕刻には無事にリュックが持ち主の手元に戻った。

今回の一件では、まず列車長の親切で臨機応変な対応に感激した。発音も四声もますぐ聞き取る力も十分ではない私の中国語を、列車長は辛抱強く聞いてくれた。私にわかるように丁寧に説明し、「心配ないよ、安心して」と何度も声をかけてくれた。そして、列車長だけではなく、鉄路局で働く人たちのすばらしい連携によってリュックが戻ってきたのである。

帰国後、この気持ちを鉄路局の責任者に伝えたい、皆さんの仕事ぶりに感謝したいと思い手紙を書いた。局長への手紙は次のように結んだ。

「私たちはどう言ってもいいかわからないほど感動しました。今回のことを周りの人たちに話し、あわせて中国鉄路局の皆さまの行き届いたサービスと気高い資質を紹介いたします」

お礼の手紙を書いた後も、北京の友人に手直してもらったり、届け先の鉄路局を先生の妹さんに調べていただいたり、中国の皆さんにお世話になった。

この文章が載った「太原晩報」を手にしてみると、不思議な感慨が湧いてくる。感謝の気持ちが伝わったのか、手紙が局長の目にとまったのか、まさか記念の「新聞記事」まで手にするとは・・・。

人と人の不思議な縁を感じて思い出す度に嬉しくなる。いい旅をした。みんなに感謝したい。



**太原铁路局局长收到一封异国来信
热心车长
感动日本旅客**

本报讯(记者 张艳 通讯员 田) 局长,您好!我是来自日本东京的高桥节子……”28日上午,太原铁路局局长杨绍清收到一封来自日本东京的感谢信。信中,对列车长牛秀霞及工作人员热心帮助高桥节子的朋友竹盖三江子我回背包表示衷心感谢。

本月6日一早,高桥节子与3位朋友结束了美好的山西之旅,登上了由大同开往北京西的K616次旅客列车,准备次日经北京返回日本。当日8时28分,距离开车只有5分钟的时候,高桥节子的朋友竹盖三江子突然发现随身携带的背包遗失了。情急之下,朋友中唯一懂

▶「太原晩報」掲載の全文は、こちらから閲覧できます。
<http://www.xplus.com/papers/tywb/20110630/n46.shtml>

キクユ族のママ、ワンガリ・マータイさんの生き方に学ぶ

アフリカンコネクション 竹田悦子

2011年9月25日、アフリカのケニアから世界中に訃報が届いた。日本では、毎日新聞との「もったいないキャンペーン」で有名になった。2004年ノーベル平和賞受賞、2002年にケニアの国会議員なり、2003年から2005年までは、環境副大臣を務めた。癌療養中だったナイロビの病院で、Wangari Mattai氏がこの世を去った。

ケニア政府は、彼女の死を受けて国葬とし、新聞には彼女の功績をたたえる言葉が躍った。彼女を形容するとき

は、必ず東・中央アフリカで唯一の博士号取得者であると書かれる。彼女は、ケニアだけでなく、アフリカ女性の中でも数少ない高学歴者であり、大学教授、議員、政治家であり、環境活動家であった。そこまで聞くと、人間としても女性としても、雲の上の存在として目に映るだろうが、彼女を知る人々や彼女の著作からは、

「笑顔の素敵なキクユのママ」としての人柄から出る親しみやすさと活動家として不屈の精神で生きた姿のコントラストに心動かされる。

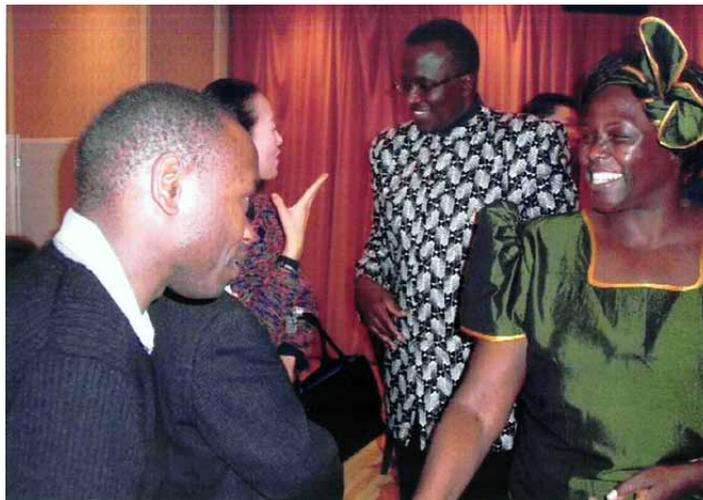
「unbowed」(邦訳：へこたれない)という本をちょうど私は今年の9月7日に読み始めた。毎日新聞の招聘で来日していた折、ケニア大使館主催の歓迎パーティーで初めてお会いしてから6年、その時に買い求めていた本を思い出したように手に取ったのだった。そこには、笑顔の裏にある彼女の人生の軌跡のすべてが彼女の言葉で綴られていた。

人として、女性として、職業を持つ社会人として、政治家として、活動家としての彼女の葛藤と充実の一つ一つが丁寧に記録されていた。本に書かれた迷いや不安は、まさに普通の人々が日々感じるものと同質のものだった。家庭と仕事の両立、学歴と男性社会での挑戦、部族間の軋轢、志を持って取り組むものささまざまな壁にぶつかる様子。それでも、歩むことを止めない理由を彼女は、「アメリカで受けたウーマンリブ^注の影響」と本で述べている。

女性である故、ケニア社会やケニア政府から受けてき

た差別や偏見は、失業させられたり、投獄されたりといった形となってマータイさんを襲った。マータイさんがやりたいと思っていたいろいろなことを諦める十分な理由になると私は感じる。しかし、決して何一つ諦めなかった彼女。むしろマータイさん自身に起こったことを糧として、自分の専門とする環境保護とケニア女性やアフリカ女性の地位の向上を目指す活動を組み合わせ、植林活動として広めて行った様に思える。

彼女はケニア最大部族のキクユ族で、彼女の実家は、



歓迎パーティーでにこやかに談笑するマータイ女史(右)

私の義理の両親が住むキアカンジャ村からは、目と鼻の先だ。8年前、実家の畑を訪ねたときには、畑の端に、15センチほどの木の苗が100本くらいまとめて植えられていた。義母を始め、近所の女性が集まって、木の苗を共同で植えたとの事だった。そこには看板があり、「green belt movement」と書かれて

いた。彼女が代表を務めた活動の名前である。彼女は、街中から離れた村の、また奥にある畑まで苗を持ってやって来ていたのだ。

「現金収入の習慣のない農村の女性たち」は、ケニアの標準的な女性たちの姿だ。都市で仕事に就く女性が増えて来ているとはいえ、今でもケニア女性のほとんどは、伝統農業に従事し、自給自足の生活が基本であり、生活の糧を自然に頼っている。中でも、食材の煮炊きに使う薪を取るため、森林を伐採しているし、また木炭の製造も禁止されているにも拘らず、手近な現金収入の手段としてさかんになされている。そのようにして、木は生活の為にどんどん伐採されていく。マータイさんの植林活動とは、農村の女性たちに、木を使ったら植えるように導くことだった。苗は無償で提供され、植えた木が6ヶ月たった時点で成長していたら、木1本につき少しばかりの現金が渡されるのだ。

自然を守ることもよりも、現金を得ることのほうが大事と考える経済主導の価値観へとどンドン人々が変わっていくのを見つめるマータイさんの目は、貨幣経済の発展と農村での伝統生活のバランスをうまく調和させたもの

だといえる。その活動はケニア国内だけでなく、他のアフリカ諸国、または世界へと発展していった。

環境破壊は、先進国だけの問題ではない。先進国がもたらした経済優先の価値観は、ケニアの都市から農村までどんどん浸透し、人々の価値観や生活を変えていく。イギリスの植民地から独立後50年経ったケニア。その変化は、外国人の私からでも十分感じる。農業を生業として生きてきたキクユ族だけではない。放牧して生きてきたマサイ族。漁をして生きてきたルオー族。都市の経済発展と共に、農村も変わっていくし、人も変わっていく。そして生活が変わっていく。

人が、生活が、豊かになっていくとは？ マータイさんは、植林を続けながら、経済中心の価値観に警鐘を鳴らし続けた。「水、空気、土、関係ないと思っている人も思っていない人も、それら・自然からの恵みで私たちは生きている。自然に感謝することを忘れないこと」と言っている。

彼女の歩んだ道に思いを巡らす時、自分の悩みなん

て小さいと感じる。もっと大きな悩みや苦勞を体験したマータイさんは、へこたれなかったのだ。「あなたにもわたしにも出来るはず」マータイさんの人生は私をそんな風に励ましてくれている。

最後に、「土葬」が一般的なケニアにあって彼女は、「火葬」を生前より希望していたらしい。ケニアの棺は木が一般的で、自分のために木が更に1本切り倒されることを是としなかった。彼女が71歳で亡くなるまで植えた木の数、4000万本。「木」を植えることで、女性の一人ひとりの心に植え付けた誇り。枯れることなく、上へ上へ成長し続けていって欲しい。

(注) **ウーマンリブ**：1960年代後半、性による役割分担に不満を持った高学歴主婦や女子学生を中心に「男女は社会的には対等・平等であって、生まれつきの肌の色や性別による差別や区別の壁を取り払うべきだ」という考えのもとで開始され、1979年国連総会において女子差別撤廃条約が採択されるなどその後の男女平等社会の推進に大きく貢献した。「ウィキペディア」百科事典より

読む(81)

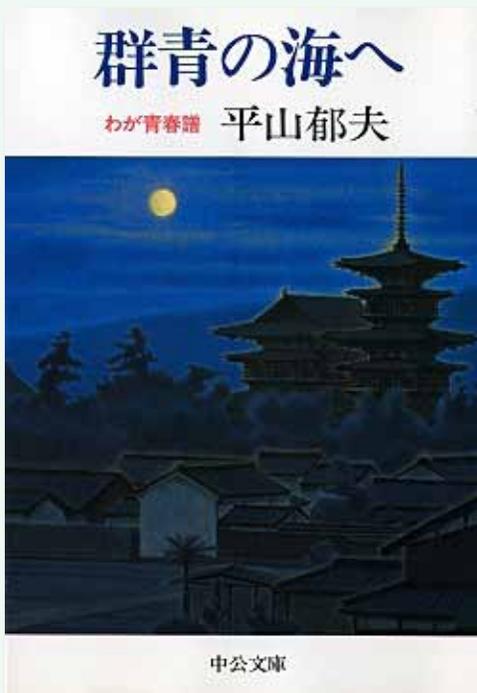
群青の海へ わが青春譜

平山郁夫著
中公文庫

十代の頃の何年か、平山郁夫氏のカレンダーを愛用していた。購入していたのではなく、父がどこからか貰ってきた。姉妹は誰も興味を示さなかったが、なぜか教養も芸術的センスもない私が、異常な執着心で毎年それを心待ちにしていた。

高校生のときに、平山氏の個展にでかけた。意外に地味な絵ばかりだなー、と思っていたら、最後に緑いっぱい絵が飛び込んできて、わっ!となった記憶がある。感受性豊かな思春期だった。素直に感動した。

カレンダーから、絵を切り取って、あちこちに貼って眺めていたことも。狭い団地の小さい勉強机に座って、切り抜きの熊野路の緑をずっと見ていた。シルクロードの絵も随分、貼った。9年前、親から借金して、JTBのシルクロードのツアーに40万円つぎ込んだのは、あのときの刷り込みだったのかと、今、思い当たったりして。平山氏の自伝的エッセイを読んで、そんな忘れていたことを思い出した。



大御所のイメージしかなかった氏だが、生活苦や原爆症に悩まされながらも、地道な努力を重ねて、ようやく認められていく。きっかけとなった作品「仏教伝来」は、人生のどん底にいた氏が、新緑の力に勇気を心得て描いた。オアシスに励まされて砂漠を旅していた玄奘三蔵。そんな想像から生まれた絵だ。日頃から仏教に惹かれていた描き手の、人生経験や読書経験が熟成し、絵筆を通して世界に出てきた瞬間だった。

氏、曰く。作品は、描き手が身につけたもの、蓄積したものしか出てこない。これは絵だけでなく、どんな仕事もそうだ。

この「わりい」も、それぞれの書き手の豊かな人生経験が表出されて、ずっと続いている。なんだかそう思うと、乏しい人生経験しか持たない私が、ページを汚していることが、改めて申し訳なくなってくる。この「読む」も、もっと頑張らないと。…えっと、次回から…。

(真中智子)

僕が鼻淵にしているホテル・フランシスの話をしましょう。

スリランカではホテルと名前が付いていても泊まるためのホテルではなく、飲食店である事が多いです。ホテル・フランシスも宿泊施設は無くただのレストランですが味は抜群です。

店があるのはコロンボからゴールロードを約98kmほど南下したヒッカドゥワです。世界遺産シリーズで紹介したゴールまでは残り20kmほどの場所になります。ヒッカドゥワという地名を初めて耳にする方も多いと思いますが、2004年12月の大津波の際に、走行していた列車が津波の直撃を受けて押し流され大勢の方が亡くなった場所がヒッカドゥワの郊外でした。2006年12月には日本の仏教関係者によって犠牲者を追悼するために高さが約19mある仏像が現場に建てられています。ヒッカドゥワの中心街は鉄道の線路よりも海側を走るゴールロードに沿って約3Kmほどのエリアに細長く密集して形成されているために大被害を受けましたが、現在ではもとの賑やかな街並みに戻っています。

ホテル・フランシスの話をする前にヒッカドゥワの話をしましょう。ヒッカドゥワは最近でこそスリランカ国内でも人気の高いリゾート地になりましたが、50～60年ほど前にはヨーロッパからのバカンス客相手のノンビリとした海辺の町だったそうです。1970～80年代には欧米からヒッピー達(ヒッピーなんて言葉自体が懐かしいですね)が集まって、なんとヌーディストビーチまであったそうです。当時のスリランカ人は、たぶん現在でも、人前で全裸になるなんて考えられず、裸になった白人を見てさぞかし驚いた事でしょうね。現在では全裸は禁止になっていますが、時々トプレス(この言葉も懐かしいです)のヨーロッパ人をみかける事があります。1泊で宿泊料が100USドルを越える高級ホテルから1泊1000ルピー(1000円ぐらい)程度のゲストハウスまで多種多様の宿泊施設があるので、予算に応じて長期滞在を楽しむ事ができます。

ビーチリゾートという割にヒッカドゥワのビーチは広くはありません。それなのに何故ビーチリゾートとして栄えたかといいますと、スリランカではあまり見られない珊瑚礁の群生が沖合にあるからです。この珊瑚礁がスキューバダイビング、シュノーケリング、グラスボートに適したスポットを提供しています。

珊瑚礁の切れた辺りから外側がサーファーにとって良い波がくるそうで滞在費の安さもあって、世界各地から多くのサーファーが集まって来ています。最近ではプロサーファーによる世界サーキットの開催地にもなっているそうですよ。日本のサーフィン雑誌でもヒッカドゥワが紹介される事が多くなってきたそうです。僕はまだ訪れた事はありませんが、日本人が経営するサーフショップもあるそうなので、仏教遺跡には興味が無くても、サーフィンには大いに興味がある方は是非スリランカの波に乗りに来て下さい。

もう一つ忘れてならないのが海亀の産卵地でもある事です。スリランカの西南海岸には海亀が産卵のために上陸するビーチは数多くありますが、その中でもヒッカドゥワは多くの海亀が集まるので有名です。海亀ファンの方もどうぞ亀さんに会いにスリランカにいらしてください。

それではホテル・フランシスの話を始めましょう。僕が最初にこの店に寄ったのは仕事でゴールに行った帰り道でした。

仕事が長引いたので、ゴールで夕食を食べてから帰ろうと言うと、会社のドライバーであり、友人でもあり、スリランカ学のお師匠さんでもあるウダヤ君が、いつもの様に自分の友人のそのまた友人だか、親戚の知り合いだか、ほとんど関係無いが何らかの関係のあるらしい人が勤めている食堂が帰り道にあると誘ってきました。ウダヤ君の推薦する店は結構怪しげな店が多く、それまでも何度か痛い目にあっていたので、辛すぎないか？脂っこくないか？不清潔ではないか等を聞いてみました。ウダヤ君はいつものようにキッパリとこの辺りではベストの店だと答えてきました。その店がホテル・フランシスです。

ウダヤ君の言う事を信じてヒッカドゥワまで戻ると、いつもは早朝や深夜に通るために素通りしていて気に留めていませんでしたが、欧米人を相手に商売している町だけに小洒落たレストランやサーフショップが目に入ってきました。これは期待出来るかもと思っていると、小洒落た店には停まる事もなく中心街よりも少しゴール寄りの古びたレストランにウダヤ君は車を止めました。

1970年代半ばに創業したヒッカドゥワでも老舗の店だそうです。席に着くと早速ウダヤ君の知り合いのウェイター君がメニューを持って来ました。ウダヤ君達が近

況報告をしあっているのを尻目にメニューをひろげると、驚いた事に200種を超える料理名が載っています。スリランカ料理を始めに、イタリアン、チャイニーズ、コーリアン、ウエスタンと何でもあります。注文をしていないので味は判りませんが、料理名はカネロニだとかラザーニャだとか本格的な料理名が並んでいます。日本料理が載っていなかったのは、幸いなのか残念な事なのでしょうか？

ウダヤ君お薦めのフライドヌードルとウェイター君お薦めの海老ガーリック炒めを食べてみました。本当に美味しかったのです、今回はウダヤ君の完勝です。ガーリック炒めのソースをパンで掬い取って食べるほどでした。この店には外人客も来ますが、地元民が家族連れで来る方が多いそうです。

海外客の味覚に迎合せず、地元の味(激辛味)を守り続けている事が老舗の真髓なのでしょう。スリランカ、特にゴールロード沿いに旅行をされる予定の方はホテル・フランシスに是非お立ち寄り下さい。美味しい料理と共にキンキンではありませんが、そこそこに冷えたビールが待っていますよ!!!

‘わんりい’へ入会を歓迎します
年会費：1500円 入会金なし
郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わんりい’

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本にいらっしゃる方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等の開催など文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。また、2月と8月を除いて年10回、会報‘わんりい’を発行し、情報の交換に努めています。入会はいつでも歓迎しています。

活動の様子は、おたより又は‘わんりい’HPでご覧ください。

問合せ：☎042-734-5100 (事務局)
Eメール: wanli@jcom.home.ne.jp

松本杏花さんの俳句 **「千里同風」**より

熟し柿鳥に気ずかひ雨戸開く

shú shì fàn chéng huáng
熟柿泛橙黄

dān xīn xiǎo niǎo luàn zhuó guāng
担心小鸟乱啄光

dǎ kāi mù bǎn chuāng
打开木板窗



季语 熟柿，秋。
 赏析 从这首俳句来看，日本人对俳句是多么情有独钟。日常生活，即兴小景都能引发诗情。无怪乎有人说，俳句犹如日本人的呼吸一样，随时随地都能自然流畅地创作出来。
 本首俳句描写了作者对快成熟柿子的爱护和对小鸟的两怜悯，凸现了自己内心世界的矛盾。

住みぬしは下級武士とよ石落の花

dà wú fēng cǎo huā
大吴风草花

diǎn zhuī xià jí wǔ shì jiā
点缀下级武士家

lǎo qiáng bàn qiū huā
老墙扮秋华

季语 大吴风草，秋。属菊科常绿多年草本植物，十月前后在六十厘米长的花茎上长出花色头花，长在温暖的海边。
 赏析 我国唐朝诗人李贺在《金铜仙人辞汉歌》中吟道：“画栏桂树悬秋香，三十六宫土华碧。”讲述了汉武帝时庭园画栏内的桂树现仍飘香，而三十六宫现已荒凉冷落。本首俳句描写的是昔日下级武士的住宅围墙上盛开着大吴风草的花朵，言外之意读者尽可揣摩。

翌朝再び車上の人となった私は、昨日理塘から戻ってきたばかりの道を再び引き返す方向へと向かって走っていた。既に何度目なのか判らなくなっている折多峠(4298m)を越え、康定と理塘の間にある新都橋という小さな街まで行ったところで、バスは大きく道を折れ、北へ向って進行方向を変えた。

この旅の最後の目的地として、この日私が目指していたのは塔公草原と呼ばれる土地だ。

実はこの一人旅が始まる前、当初の旅行メンバーとチラッと訪れていた場所だった。「わんりい」でも四姑娘山の自然紹介等でおなじみの、現地で自然保護区管理局の顧問を務めておられる大川健三氏の案内の下、四姑娘山麓の街である日隆で数日過ごし、旅の本来の目的であった大姑娘山の登山を果した私達は、風光明媚な土地と誉れ高い丹巴という街へ移動した。丹巴にて2日間美しい景色や現地の方との交流などを楽しんだ後、成都までの中継点となる康定まで戻る途中の昼食休憩で訪れた街がこの塔公だったのだ。その日バスの中でうつらうつら居眠りしていた私は、バスがスピードを緩めた気配に薄目を開け、窓の外の景色を見て驚いた。

ええええ〜？ 何ここ〜!?

大草原の真ん中を突っ切っている道路を挟み、立ち並んでいる建物の向こうには街の奥行きというものほとんど無いようだった。道路の両脇に一列に立ち並んだ建物の向こうには緩やかな丘陵の大草原が広がっているばかりで、まるで映画のセットのような街並みだ。が、それよりもまず私の目を引いたのは往来を行き来する人々のほとんどが長く伸ばした髪にテングロン・ハットのカウボーイスタイルや、赤い布と共に頭上に巻き上げた長い髪をアクセサリーで飾り、伝統的な民族の衣服を身につけた者など、皆バキバキの遊牧民達であった事だ。

通りは派手に飾りをつけたバイクが行きかい、まさに西部劇のカウボーイそのままに馬に跨り街を闊歩している者もいる。道路の向こう側に広がっている草原にはいくつかのテントが建てられているのも見受けられ、この町の定住者ではない遊牧生活者もこの塔公草原に集まってきている様子だった。

何なの!? 何なの!? この町は〜!? まるでチベット版西部劇の撮影セットの中に迷い込んでしまったよう



塔公の街の神山

祈祷旗でかたどられた三角形は、それぞれ文殊菩薩、弥勒菩薩、観音菩薩をあらわしてるそうだ

な気分だったが、バスを降りて辺りの風景を見た私は、更に不思議な気持ちに包まれた。

町の突き当りには否が応でも人目を引く立派な寺院が建てられおり、道路を挟んで屏風のように一列に伸びている町並みはこのお寺の門前町の様な様相だ。町の頭上には向かいに聳える丘の中腹からこの細長い町を跨ぐように道路の向こう側まで、まるで万国旗のようにみえるタルチョが長い長いロープで張られ、青い空を背景に色とりどりの祈祷旗が風に吹かれていた。町の端々には小高く盛り上がった築山の上にチオルテンと呼ばれる仏塔が建てられ、更に寺院の裏手から町の正面に聳えている丘の斜面いっぱいにはダルシンと呼ばれるノボリのようなチベット仏教の祈祷旗が三つの三角形をかたどってギッシリと立てられて町を見下ろしているのがどこか怪しく奇怪な雰囲気にも思われた。

チベット仏教について特に詳しい知識を持たない私には、実際のところがどうなのかは想像の域を出ないが、何やらこの町はこれまで訪れてきた何処よりも宗教色が濃く感じられる土地のように思われた。

私はいっぺんにこの一風変わった不思議な町に夢中になっていた。

軒を並べる門前町にはチベットのアクセサリーや民具など、面白そうなお店が軒を連ねているし、その場にいるチベット服姿の女性や勇ましい天空のカウボーイ達に目を奪われ、なにより彼らが連れている、ちょっぴり汚れた顔をした野生児達の可愛らしさといったら堪らない。間口を広く開け放ったビリヤード

店では粋な荒くれカウボーイ達が、カトゥーン、カトゥーンとビリヤードに興じている姿も眺められた。お金でも賭かっているのか当事者以外の観戦者も勝負の行方を熱い眼差しで見つめ店内の熱気が表まで伝わってくるようだ。

旅行メンバーの面々と一緒に歩きながらも、私はついつい吸い寄せられるように目についた店の中に入り込んだり、可愛い子供を見かける度に駆け寄って行って折り紙を折って見せたりと、興味をひかれた方向に夢遊病者のようにフラフラと歩き出してしまい、その度に旅行メンバーに加わっていた母に袖を引かれて叱られた。

「団体行動なんだから、一人でどこか行っちゃダメでしょう!」

「子供じゃないんだから勝手にいなくなるしないで!!」

「何やってるの! いい加減にしなさい!!!」

そりゃあグループ行動で個人が勝手に動いていたら皆の迷惑になるだろうと、そんな事は解っているが、私はこの町の雰囲気ですっかりのぼせてしまっていた。この期を逃せば再びこんな面白い場所に来るチャンスなど、そうないだろう(この時はそう思っていた)、そんな貴重な時間を無駄にしてじっとしてなきゃならないなんて無理な話だ。

しかし私以外のメンバーは特にこの地に執着する様子もなく、旅の一行はこの塔公ではお寺を拝観をした後、町の中のレストランで食事を取るとすぐに再びバスに乗りこの町から立ち去ってしまう事となり、私は歯軋りしたい思いだったのだ。町の食堂で食事をしながら案内役の大川さんに伺った話では、この塔公は近年に作られたばかりの観光色の強い町で、遊牧民達の姿が数多く見られるのは付近の草原から遊びに来ている者たちなのだそうだ。町としての歴史があるわけでもなく、本当はそんなに面白い場所じゃないとの説明を受けたのだが、それでも私は自分の気持ちを静める事はできなかった。

なるほどあの日訪れた塔公の町中には観光客風の旅行者の姿も数多く見られ、寺院ではしっかりと入場料も徴収された。軒を連ねた店は土産物を扱う店も多く、草原で暮らすカムパ(この地方に暮らす民族の男性を指す言葉)の生活が店内で紹介されていると広告を掲げた店や、草原でのホース・トレックを誘うチラシのようなものを配っている男の姿も見受けられるなど、確かに観光地的な色合いが感じられない事もな

かったが、それでも遊牧民達で沸き立っているような活気が感じられた町の雰囲気や、大草原に遊牧民とチベット仏教という、私がこの四川省のカム東部地方に惹きつけられる要素が凝縮されたようなこの塔公の町は大いに魅力的だった。

とにかく興味を感じた土地は、自分で納得のいくまで歩き回り味わってみなければ気の済まない私は、町を出るバスの窓の外に流れ去っていく風景を眺めながら拳を握りしめ、「ああ～～、ダメだ! ダメだ! ダメだ! ここはいつか絶対に一人で戻ってこなくっちゃ～!」と心の中で何度も叫んでいた。

その後日本に帰国する旅行メンバーと別れ、一人でこの地に残る決意を固めた私は、すぐさま旅の間に必ず訪れたい場所としてこの塔公をしっかりと心の中のリストに刻み込み、その望みが叶えられる日をずっと楽しみにしていたのだ。改めて思えば塔公に限らず今回の一人旅全ての旅程が、過去の旅行で想いを残していた土地を自分流の歩き方で再確認する為の旅だった。そうして過去に訪れた土地を時間をかけて一つ一つゆっくりと歩きなおしてみれば、きっと以前には見えてこなかった新しい何かが見つかるのだ。

康定の宿に大きなザックと不要な荷物は預けてしまっていたので、今回の移動は小さなザック一つでの身軽な旅だった。昨夜泊まった香格里拉(シャングリラ)招待所の小姐は気さくな人柄で、私が長旅で薄汚れた大きなザックを見せ「2、3日ここで預かってくれる?」とお願いすると、洗濯機の使用許可を求めた時と同様に一つ返事で「いいわよ」と受け取ると、自室と思われる部屋の中に運び込んでくれたのだ。

相変わらず空は高く青くいいお天気だった。前日の理塘から康定に向かった時の寂しさに沈んだ気持ちはすっかり影を潜め、最後の楽しみにとずっと温めていた塔公草原へと向う旅路は、バスの不具合により修理の為に小一時間程緊急停車するなど、この辺の土地にはありがちなハプニングさえ楽しめてしまうほど、私の気持ちは弾んでいた。

ああ嬉しい! あの時はいったいつ、この町に戻ってくる事が出来るだろうと無念の涙を呑んだ場所に、こんなに早くこれの日が来るとは思わなかった。

明るい光に包まれた草原の真ん中をポンコツなミニバスに揺られ、幸せな気分を味わっているうち、広い草原の真ん中に忽然と現れ映画のセットのような、あの不思議な町に到着した。

(次号に続く)

10月2日、町田中央公民館で第4回「漢詩の会」が開催されました。第1回から第3回は、豪傑役を役どころとする京劇俳優の殷秋瑞さんがすばらしい朗読を聞かせてくださったのですが、殷さんのお仕事の都合で、桜美林大学名誉教授で孔子学院講師の植田渥雄先生に「漢詩の会」の講師をお願いすることになりました。

植田先生の第1回講座に当たる今回は、李白の詩4編「早に白帝城を発す」・「秋浦の歌其の十五」・「月下独酌」・「黃鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」を選びました。

先ず先生の中国語による朗読を聞かせていただき、参加者にも朗読のご指導をお願いしました。先生の朗読は、詩の背景を熟知された情感のこもった素晴らしいものでした。朗読はこれから毎回、一編を選んで中国語での朗読を指導を頂きます。中国語を勉強中の方々には発音の訓練になりますし、中国語をなさない方は、詩吟と同じ様な感覚で、中国語の音とリズムを習得されたら、同じ詩の日中対比が出来て、面白いのではないかと思います。

お話は、李白の人となりや、各詩に込められた作者の思い、其の時期の生活状況、更には当時の社会情勢等々、繋がり拡がり1時間半はあっという間に終わりました。興味深かったのは、有名な「早に白帝城を発す」の制作年代が未だ特定されておらず、2説あるというお話です。一般に言われているのは、李白の晩年、罪を得て刑地・夜郎に赴く途中で恩赦の知らせを受け、急遽引き返す時の作であるとの説です。これに対して、この詩は李白が故郷を後にして世の中に出て行く時の作品であると言う説もあって、この説の根拠となるのは、詩中の〈兩岸の

猿声啼いてやまざるに〉と言う一節であるとのお話です。中国では、猿の声は悲しいものとされているので、恩赦を受けて引き返す嬉しい時の詩には相応しくないとのことだそうです。

そして、猿の声を悲しいものとする関連で、「断腸の思い」の「断腸」とは、子供を奪われた母猿が子猿の乗せられた船を啼きながら追いかけて、とうとう死んでしまった母猿のお腹を裂いてみたらその腸がズタズタに切れていたことから来ているもので、以後、耐え難い悲しみを「断腸の思い」というようになったと言うお話もされました。

当日は、出席者は9名と、人数的には寂しかったのですが、参加者全員の希望で「鉄は熱いうちに打て(!?)」とばかりに、先生のご都合と会場の使用可否をつき合わせて、11月6日に第5回「漢詩の会」を開催します。日が迫っていますが一人でも多くの方に是非ご参加頂きたいと切望しております。

11月6日の第5回「漢詩の会」では、「詩仙」李白に対して「詩聖」と称される杜甫の「春望」・「絶句2首」のお話を伺います。関連で「絶句漫興」のお話も伺えるかも知れません。中国語の朗読は「春望」をご指導いただきます。きっと楽しいひと時になると確信しています。

(報告・有為楠)

参加者の感想(アンケートより)

「背景の説明が分りやすく、詩の流れがよく理解できた」
「説明たっぷりで見込まれた」
「先生の朗読の美しさに酔った」
「関連する事項の説明があってよかった」
「楽しく勉強できた」等々。

【わんりいの催し】 第5回 中国語で読む・漢詩の会

- ▲日本でもよく知られている漢詩を、中国語の音とリズムで楽しもう!
- ▲正しい発音で読めるように練習しよう!
- ▲四回目の漢詩の会は、桜美林大学孔子学院講師・植田渥雄先生と共に杜甫の詩・3編を時代を追って読んでみます。
- ✳「国破れて山河あり…」で知られた杜甫の名詩・五言律詩「春望」を繰り返し読んで練習します。中国語を学んでいらっしやらない方も、是非ご参加ください。

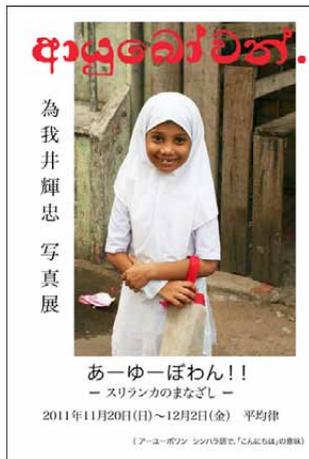


- 場所：まちだ中央公民館7F・音楽室2
町田市原町田6-8-1
JR横浜線町田駅ルミネ口2分/小田急線南口5分
- 期日：2011年11月6日(日)
- 時間：10:00～11:30
- 会費：1500円 ● 定員：20名
* 録音機をお持ちの方はご持参下さい。
- ◆ お申込み&問合せ(有為楠)：☎050-1531-8622
E-mail: ukiuki65jpp@yahoo.co.jp

【植田渥雄先生略歴】

- 1937年、岡山市生まれ。東京大学文学部卒業。
- ▶ 元桜美林大学教授
- ▶ 元NHKラジオ中国語講座担当講師
- ▶ 現桜美林大学孔子学院講師
- ▶ 現桜美林大学名誉教授

為我井輝忠氏(わりい会員)の写真展



(こんにちわ!!) **「あーゆーぼわん!! スリランカのまなざし」**

11月20日(日)～12月2日(金)
12:00～21:00(*日曜日13:00～21:00)

ところ:「平均律」(珈琲&紅茶&バロック音楽の店)

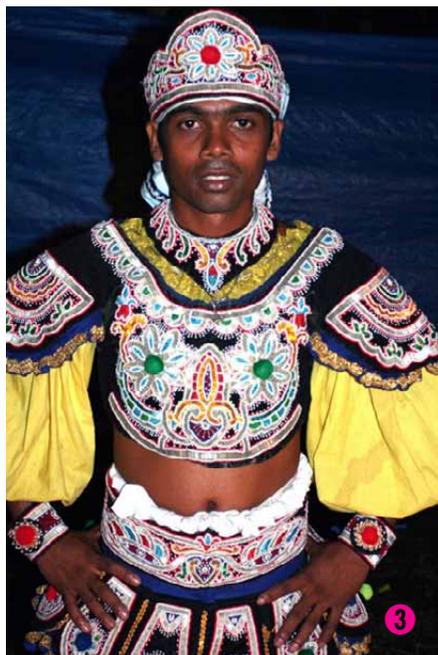
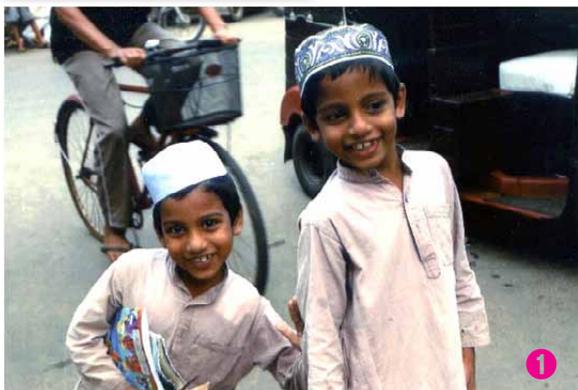
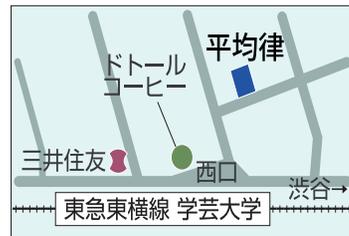
目黒区鷹番3-7-5 ☎03-3716-6537 / 東横線学芸大学駅西口より徒歩0分

●ミニトーク「スリランカってどんな国?」11月23日(水) 11:00～13:00
参加費:1000円(紅茶付)

1986年に初めて訪れて以来、スリランカに通って20年余が経ちました。激しい民族紛争が続く大変な時期もありましたが、いつも温かく迎えてくれ、歓迎してくれまし

た。人々は微笑みを絶やさず、困難を明るさで吹き飛ばす勢いがあり、そんなスリランカが好きでした。今回、ささやかながら撮りためた写真の展覧会を開催します。

スリランカは何度でも訪れたい国です。その理由をこれらの写真から想像してみてください。
(為我井)



- ① コロンボの子供たち
- ② 恋人たちの世界
- ③ 若いキャンディアン・ダンスの踊り子
- ④ バナナを売るおじさん
- ⑤ スリランカの伝統的世界を描いたパティック(ろうけつ染め)



【わんりいの催し】 23年度町田市・つながりひろがる地域支援事業/対象事業

つなげよう!ひろげよう!地域の和と輪

聞いてみよう!鶴川地区に住む留学生たちのスピーチ!! 楽しもう!中国の民族音楽!!



二胡の演奏

- 1部: アンデスの民族楽器・ケーナ演奏 13:00 ~
 2部: 国士舘大学・留学生たちのスピーチ 13:20 ~
 3部: 中国民族音楽演奏 14:15

● 2011年12月18日(日) 13:00~15:45 (開場12:30)

● 場所: 鶴川市民センター・ホール

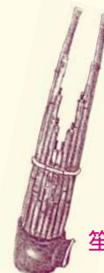
町田市大蔵町1981-4 ☎042-735-5704

鶴川駅0番バス停野津田車庫行「下大蔵」下車

鶴川駅1番バス停若葉台行「鶴川市民センター前」下車

● 参加: 500円

- ◆ 中国民族楽器演奏: 銭騰浩(中国笙)、曹雪晶(二胡)、林敏(揚琴)
 ◆ 演奏曲: 春光花月夜(揚琴)、さくら変奏曲(揚琴)、山門峡暢想曲(二胡)
 荒城の月(二胡)、鳳凰展翅(笙)、流水歡歌(笙)、花好月圓(合奏)
 喜洋洋(合奏)、蘇州夜曲(合奏) 他 ◆ ケーナ演奏: 山下孝之 オリジナル曲



笙



揚琴

主催: 日中文化交流市民サークル 'わんりい' 後援: 町田市/(財)町田文化・国際交流財団

問合わせ&申込み: ☎/FAX042-734-5100 'わんりい' 参加券: 久美堂本店 ☎042-725-1330

銀芽茶館

~中国茶を飲みながら中国ライブを楽しむ~

会場: 山王オーディウム

JR京浜東北線大森駅徒歩8分

東京都大田区山王1-14-7

☎03-3777-4681 (開催日のみ)



● 11月の開館日:

11/11(金) 12:30~20:00 (オーダーストップ19:30)

11/12(土) 12:30~20:00 (オーダーストップ19:30)

11/13(日) 12:30~18:00 (オーダーストップ17:30)

中国茶茶席: ¥700~

◆ 中国茶講座 (各回3~8名)

入門講座: 2000円 (中国茶2種)

11月11日(金) 18:30~20:00

特別講座: 3000円 (中国茶6種)

11月11日(金) 13:30~15:00

12日(土) 17:00~18:30

● イベント(要予約)

◆ 中国結び講習: 茶壺の蓋の紐、携帯ストラップ

天然石プレスレットなど

1000円 (材料費別途: 100円~2000円)

11月13日(日) 13:00~15:00

講師: みなみりょうこ先生

◆ ゲストライブ (定員35名)

2500円 (お茶代含む)

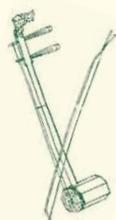
11月12日(土) 13:30~

特別ゲスト: 楊擎宇(二胡)

◆ 展示: みなみりょうこ「中国結びの世界」

● 問合せ&予約 ラサ企画

☎03-5748-3040



町田国際交流センターの催し

◇ 講演会「世界のエネルギー問題を考える」◇

~国際情勢の変化と日本の対応~

エネルギーの問題は私たちの生活と密着している。

- 海外からの輸入に頼るエネルギー原料の問題
- 福島原発事故による原子力発電の供給減少の問題
- 地球温暖化問題への対処

など、世界のエネルギー情勢と動向を踏まえた今後の日本のエネルギー問題を考える。

12月3日(土) 14:00~16:00 (13:30開場)

会場: 町田市民フォーラム3Fホール

町田市原町田4-9-8

JR町田駅ターミナル口徒歩2分/小田急町田駅南口7分

参加無料/定員: 180名(先着)

講師: 石田博之氏 (青山学院大学社会情報学部教授)

主催: (財)町田文化・国際交流財団町田国際交流センター

● 申込み&問合せ ☎042-722-4260

(申し込みに当たって、住所、氏名、参加人数、電話番号が必要です)

● 申し込み締め切り: 11月25日(金)

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。古切手は周りを1cmほど残して切り取り、おついで折に 'わんりい' の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

[11月の定例会と12月号の発送日]

◆ 定例会: 11月7日(金) 13:30~ (田井宅)

◆ 12月号のおたより発送日: 12月1日(月) 13:30~